

「在日の慰安婦裁判を支える会」事務局に参加して

杉山 優子

(宋神道ハルモニ支援団体)

私が在日の慰安婦裁判を支える会（以下「支える会」）の事務局に加わったのは23歳の大学院生だった1995年頃だった。支える会は1993年1月23日に発足しているのだから、事務局メンバーの中では一番最後に加わったことになる。

初めて参加した会議のことはよく覚えている。支える会の方針は、原告である宋神道さんの意思を最優先することだったが、当時の事務局参加者の中には裁判の続行を宋さんの意思に任せることに反対する人もいた。これは事務局の発足当初からあった対立だったようだが、私が参加した会議は正にその対立の最後の局面だった。事務局の多数派の考え方は、裁判の目的はあくまでも宋さん自身の被害回復であり、宋さんの意思に反して裁判を続けさせることはその目的に反するというものだった。日本社会や日本国家を批判したいのなら、被害者を盾にするようなやり方はすべきでないと考えていた私は、支える会の方針に全面的に賛同できた。また、事務局の一人の在日女性が私にかけてくれた言葉も背中を押してくれた。彼女は、私に「この問題を若い人たちに知ってもらいたいと思っている」と言った。「日本人に」ではなく「若い人たちに」という言い方は、日本人である私も含めて自分に続く世代として受け入れてくれている気がして嬉しかった。

事務局には日本人も在日もいたが、事務局メンバー同士の相互理解や軋轢などはあまり問題にならなかったと思う。なぜなら、裁判支援活動で最も大きな課題となったのは、何よりも宋神道さん本人との相互理解だったからだ。事務局メンバーの一人、梁澄子さんは裁判活動を振り返って、宋さんから「支える会を一番信用している」と言われたことを「宋さんの疑心の深さに、幾度となく悲しい思いをしてきた私たちにとって、それは5年間待ちに待ったうれしい言葉だった」¹⁾と述べている。

宋さんは当時宮城県に住んでおり、口頭弁論のあるときだけ東京に通っていた。事務局の中で宋さんと直接にやり取りするメンバーはほぼ固定していて、このメンバーには早朝、深夜を問わず宋さんから電話がかかってきた。それはテレビのニュースで聞いた政治家の発言や近所の人から言われたこと、また先の知れない裁判のことで宋さんが不安や怒りに駆られた時だった。16歳で中国に連れて行かれて「慰安婦」にさせられたこと、戦後たどり着いた日本で何の補償も受けられず、生活保護を申請せざるを得なくなったこと。地元で一人暮らしをする宋さんの普段の生活の中では「戦争への道を許さない女たちの仙台の会」のように寄り添ってくれる支援者もあったが、受けた被害やその後の境遇についての理解や共感に圧倒的に少なかった。日本の裁判所は、個人には国家に対する賠償請求権はないという国側の主張に追随することなく、宋さんの被害の実態と戦後の無救済の状況について少しでも踏み込んだ判決を示すことができるのか？生活保護をもらっているくせに国を訴えるのかと言う周囲の人々は、もし敗

訴となったらどのような反応をするのか？もし敗訴となったらどうやってこの日本で生きていけばいいのか？裁判が続いていた何年もの間、宋さんはもちろん、支える会の誰もの心にのしかかっていたのはこのことだった。日本国家や日本社会に対してこんな辛い裁判を続けて何か意味があるのかという宋さんの不安は消えることなく、いらだちは支える会自体にも向けられた。支える会は一体何をしてくれるのか？結局は裏切るのではないのか？「オレは誰の言うことも信じない」「オレは我が心しか拝まないの」。宋さんが言うその言葉は、時に威勢のいい啖呵のようにも聞こえたが、文字通り、支える会も含めて誰も信頼できる者はいないという意味だった。

事務局会議では「宋さん対応」と称して、直接に宋さんとやり取りするメンバーを中心に宋さんから受けたその時々の言動を報告しあって共有し、分析しながら、何が宋さんの疑念の原因となっているのかを探り、緩和していくことが毎回重要な議題となっていた。この作業は、宋さんの不安や怒りを和らげるだけでなく、事務局メンバーが宋さんのことを深く理解し、宋さんの信頼を得ていくことに役立っていたと思う。しかし、この作業がうまくいかない場合もあって、それは大抵はお金に関係している時だった。

宋さんにはお金に強い執着があった。それは誰も信頼できないことと表裏一体だったように思う。人間は誰も信用できないからこそ一層、唯一頼れるものとしてお金に執着する。事務局メンバーの中には、付き添いの時に宋さんの持ち物に触れただけで泥棒と疑われた人や、あるいはきっかけがはっきりしないまま「あれは金が目当てだ」と言われ続けた人がいた。そして宋さんは、そうやって疑った人間のことはまさに手のひらを返したように容赦なく罵った。宋さんと身近に接すれば接するほどこのような罵倒に遭う可能性が高く、得られたかに見えた信頼関係はまったく役に立たなかった。宋さんとのやり取りに疲れ切ったメンバーがいるときには、ほかのメンバーがしばらく宋さんと距離を置くことを勧めることもあった。

宋さんに対応する大変さを目の当たりにし、普通に考えれば理不尽としか思えない宋さんの態度を見て、私は正直に言って宋さんと関わりあう勇気が持てなかった。なぜ人をそんなにも疑うのか。宋さんの言動に深く傷つけられているであろうメンバーが宋さんに対応し続けるのを見て、とても自分にはできないと後ろめたく、中途半端な自分が嫌で事務局活動をやめたいと事あるごとに思っていた。やめたいといつも思いながらたどり着いた結論は、私は宋神道さんを支えることはできないけれど、少なくとも宋さんを支えている事務局メンバーを支えることはできる、というものだった。

梁澄子さんが言っている「5年間」とはそういう5年間だった。5年で宋さんの根深い人間不信が払拭されたわけではなかったが、初めて感謝の気持ちが語られた。以前にはまったく想像できないことだった。

10年に及んだ裁判は2003年3月28日に最高裁で上告棄却となり終結した。裁判で負けたらどうやって日本で暮らしていけばいいのか？宋さんが出した答えは「オレの心は負けてない」だった。これは2007年に完成した裁判の記録映画のタイトルになった。映画の最後で宋さんはこう述べている。「今繰り返し繰り返ししゃべったって元のようになるわけじゃないし、どうにもならねえ。・・・だけど、わかってくれる人はわかってくれるからさ」。私は直接宋さんからこの言葉を聞いたことはなく、映画の中で初めて聞いた。宋さんがこんなことを言うってくれるとは思わなかった。この言葉を聞いた時、これだけで

事務局活動に参加してきたことが報われたと感じた。

裁判が終わっても宋さんの生活は続いていく。支える会は裁判支援から宋さんの生活支援へと活動を移行した。裁判という具体的な目標はなくなったが、記録映画の上映会、日本軍性暴力被害に関連する集会やイベント、宮城県に住む宋さんの家への月一回訪問とその生活報告などを内容として会報の発行も続けていった。2010年11月には米寿のお祝いを東京で行い、宋さんも上京した。その翌年、2011年3月11日に東日本大震災が起こっている。宋さんが住んでいた家も津波で流された。地震から数日後、宋さんが避難所にいることが確認でき、事務局メンバー数人で迎えにいった東京に連れ帰ってきた。

裁判支援活動の頃は宋さんと直接関わることから逃げていた私だったが、宋さんが東京に避難してきてからはそういうわけにいかなくなった。私は付き添いをするくらいしかできなかったが、他の事務局メンバーは避難者用都営住宅への入居、被災補償手続きなど、宋さんの東京での暮らしを整えるために奔走していた。宋さんが都営住宅に無事入居し、暮らしが落ち着いてきたときには本当にホッとした。東京での一人暮らしが始まってからは、交代で宋さんの様子を見に訪問した。最初は宋さんと二人きりになるのに緊張したが、宋さんは裁判をしていた頃とは明らかに変わっていた。訪ねていくと嬉しそうな様子を見せてくれた。お昼ご飯を一緒に食べ、他愛のない話をし、ときには事務局の誰彼の悪口も出てきたが、裁判の頃のような深い不信に満ちたものではなかった。

2012年11月に宋さんは90歳になった。会報の記録を読み返すと、この頃から外出が特に減り、ヘルパーの訪問を受けるようになっていく。宋さんの様子について報告できることも少なくなった。2014年11月の92歳の誕生日まで外出してレストランでお祝いすることができた。この頃から、事務局メンバーの名前が出てこないことが多くなった。訪ねて行った私に「顔は覚えてるんだけどな」と照れたような済まなそうな顔で宋さんが言ったことを覚えている。2015年の夏に宋さんは体調を崩し入院した。一旦退院した後、再び入院し、事務局では特別養護老人ホームへの入所を検討し始めた。年末には退院の期日が迫っており、ホームに入れなければ自宅で24時間介護が必要になるということだったが、年明けに希望していたホームに入所できた。それから亡くなるまでの1年余り、宋さんはこの特別養護老人ホームで過ごしたが、職員の方は本当によく宋さんのお世話をしてくださった。いつ行っても宋さんは穏やかに過ごしており、安心できた。この頃には宋さんに話しかけても返事が戻ってくることはなく、食事の介助がわずかに宋さんと交流できる時間で楽しかった。2017年12月16日、宋神道さんは95歳で亡くなった。支える会が発足してから25年が過ぎようとしていた。

宋さんが亡くなった後、宋さん以外の「慰安婦」被害者や韓国での取り組みに目を向ける余裕ができ、韓国において「慰安婦」問題が自らの社会に対する反省や批判の視点も含めた人権の問題として発展していることに強い印象を受けた。「慰安婦」被害者の女性たちが暮らすナムムの家の記録映画を撮ったピョンヨンジュ監督は、インタビュー映像の中で、女性たちが韓国社会の中でなぜ長い間声を上げられなかったのかを考えなければならないと述べている。今でも戦時下で性暴力の被害に遭っている女性たちを支援したいという「慰安婦」被害者の吉元玉さん、金福童さんの意思を受けて設立されたナビ基金はコンゴの紛争下で性暴力に遭った被害者を支援するほか、ベトナム戦争時に韓国軍人の性暴力を受けたベトナム人女性を支援し、韓国政府に対し責任の履行を求め、この事実を若い世代に伝える活動も行なっているという。

事務局活動に参加して22年、事務局に集まった女性たちの支援を受けて宋さんが自ら被害回復していく過程を見てきて、宋さんは私にとってとても大切な人になった。一方で、他の「慰安婦」被害者の方々の言葉を読んだり聞いたりするようになって、宋さんも同じようなことを言っていたと思い出し、私は果たしてどれくらい宋さんのことを理解していただろうかと思うようにもなった。宋さんのような女性たちを大勢生み出した日本の植民地支配とはどのような歴史だったのか。人権侵害とは何か、人権の尊重とは何か。他でもない加害国の日本において宋さんや他の「慰安婦」被害者たちの訴えの意義が理解され、尊重されるようになって欲しい。そのために私も学び、行動していきたい。

注

- 1) 在日の慰安婦裁判を支える会編『オレの心は負けてない』樹花舎、2007年、39ページ